

---

# 赤い彗星になりたかった少女

沙月涼音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い彗星になりたかった少女

### 【Nコード】

N5978F

### 【作者名】

沙月涼音

### 【あらすじ】

赤い彗星をこよなく愛する少女がいた。彼女は彼になりたかった。しかし、彼女は彼ではなく、ただ普通の少女だった……。

進藤小雪、15歳。彼女は彼になりたかった。赤い彗星に……。

小雪が彼に出会ったのは何時だったろうか。彼女自身にもはつきりした記憶はなかった。ただ、この人の生き方に惹かれた。それだけだった。

「ねえお母さん」

ある日の朝食時だった。小雪はトーストを片手に言った。

「何よ、改まって。変な子ね」

「どうして、私の名前『小雪』なの？」

「は？」

母は思った。確かこの質問前にもされたか？ と。

小雪は何時も納得がいかなかった。何故、自分の名前は『キャバル』または『シア』ではないのかと。否、常識的に考えれば自分の娘に男子の名前など命名するはずは無いのだ。

「どうして、キャバルじゃないの？」

「あんたねえ」母は呆れてうな垂れた。「そんな名前付けられる訳ないでしょ」

「だって、お父さんガナムのファンだったんでしょ？」

小雪の父は1st世代である。プラモは新製品が出る度に、早朝から並んだモノだ、と何時も自慢げに語っていた。そんな父ならきつと、自分と同じ彼に憧れていたと思っていた。しかし、父は『セラ』のファンだった。まあ、それは男子としては妥当な選択である。

小雪は、生まれ出た時点で性別が違うという決定的な違いを与えられた。こればかりは本人の意思ではどうにも出来ない。ならせめて名前だけでも……とは思ったが。

「だいたい、女の子の名前ならともかく」

「でもっ」

「はいはい、この話はおしまい。ほら、学校に遅れるわよ」  
「げっ」

小雪は三の倍数が好きだ。彼が三倍早いMSに乗っていたから、単純な理由である。しかし、自身がMSに乗れるはずもなく、代わりの乗り物も無い。強いて言うなら自転車位なものだ。とは言え、アホにはならないので心配は無用だ。

「小雪いゝ早くしないと遅れるわよ！」

後ろから聞きなれた声が聞こえたかと思うと、一陣の風の如くすり抜けた。

「っさいぞ麻友。んな事分かってるわよ」

何時もの通学路、そして何時ものように小雪はクラスメイトに後ろから抜かれる。彼女はちよつと運動が苦手であった。三倍頑張つて、人並みの速さかもしれない。

「ちいつ」例え遅くても、プライドだけは彼なのだ。

校門を通り抜ける頃は、ギリギリだった。階段を駆け上がり、教室に滑り込む。

「くそっ、あの白奴」などと呟きながら。

小雪の言う『白い奴』とは、今日も抜かれた白いMTBに乗る同級生、尾崎麻友の事だ。

「小雪い、アンタおっそいわねえ」麻友が涼しい顔で迎える。

彼女は小雪にとって彼女はライバルだった。まあ、勝手に思っているだけなのだが。それでも、ライバルと呼べる人間がいる程人は強くなれる。

「連邦のMSは化け物か！」指差し、小雪が叫ぶ。

「ちよつとお小雪っ、毎回毎回失礼じゃない？」

「今度こそ、勝つ！」

麻友の言葉は届いてない様子だった。

数学の教師が教壇に立っていた。小太りで、背が低く少しおでこが広い。

彼はA4の紙の束を手に持って、低い声で言った。

「えー、これからテストを行う」

言った途端、教室内のざわめきが広がった。

「ちっ、こんな時に……」小雪は短く舌打ちをする。ちらり、彼女の方を見る。ライバル心メラメラの麻友を。だが、彼女は余裕綽々と言った風で笑みまで浮かべていた。

麻友が小雪の視線に気が付いた。

「ん？」

「絶対、勝っつ！」

握り拳を見せる小雪に、麻友は持っていたシャーペンをくるり、指で回して見せた。

「くっ」

小雪は、華麗にペン回しする彼女が羨ましかった。別に出来なくとも、これからの人生に大きく影響を及ぼす訳でもないのだが、彼女に出来て自分が出来ないのが悔しいのだ。

練習もしてはみた。が、不器用な小雪がそう簡単に体得出来るはずも無かった。それを知ってか知らずかは不明だが、麻友は小雪の前でよくペン回しをして見せていた。

「いいか、今日のテストは今後の参考にするからなあ」

再びざわめく。今度は一度目よりも、声のトーンに恨めしさが混じっていた。

だが、小雪だけは違い。無言で麻友を直視していた。

教師は、全員にテストが行き渡ったのを確認すると言った。

「それでは、始め」

一斉に裏返っていたテストを返す音が響いた。早い者はすぐさま

ペンを走らせる。小雪はといえば……テスト用紙をじつと見詰めて動かない。

「私に扱えるのか？」

などと言いながら、腕組をした。

しかし、答えは一向に出てこない。脳裏に思い浮かんだ公式が、目の前にある問題に使えるのかどうか。小雪には皆目見当が付かなかった。

「出資者は無理難題をおっしゃる」つい口について出た言葉だが、この場合『出題者』というのが正しいだろう。

そんな思考を巡らせる間にも、時間は刻々と過ぎていった。

三分後。

誰よりも早く誰かが立ち上がった。

小雪は組んだ腕もそのままに、そちらに視線を向けた。麻友だった。

麻友はわざわざ遠回りして小雪の横を通り過ぎ、教壇の横でパイプ椅子に腰掛けている教師に向かい、テスト用紙を教壇の上に置いた。

小雪は腕組を解くと、机を叩き立ち上がった。

「全滅？ 12問の難問を？ 三分もたたずにか！？」

「悪いわね、あんたとは出来が違うのよ」

麻友が勝ち誇ったように笑う。

「それに、その台詞……彼のじゃないわよ」

「え？」

小雪は、また敗れ去った。

「私は……あの人に勝ちたい」

「それも、違うわね」

「うぐ」

駄目だしされた瞬間だった。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5978f/>

---

赤い彗星になりたかった少女

2010年10月8日15時42分発行